

# 懸賞論文の選考について

経済学部では、1985年から研究演習Ⅰ・Ⅱの在籍者を対象として、懸賞論文を募集している。本年度は、個人執筆論文部門に4本、共同執筆論文部門に7本の応募があった。応募点数は例年に比べて多い。いずれも意欲的に取り組まれた論文であった。選考委員会の審査と教授会の議を経て以下の論文に賞を与えることになった。

## 経済学部懸賞論文受賞者と論文名

### 入賞

#### < 個人執筆論文部門 >

九門 信（新海哲哉ゼミ）

「持株会社制度における企業結合の理論的研究—費用削減効果発生による有効性の検証—」

#### < 共同執筆論文部門 >

松浦 颯・加藤 要・上村 光・酒井菜緒（栗田匡相ゼミ）

「マダガスカル農村における稲作新技術の社会的学習要因と情報の中心性」

### 佳作

孫 慶志・谷本一輝・森 太一・吉田拓海（東田啓作ゼミ）

「完全養殖ウナギの支払意思額」

村上鈴佳・粟井大貴・中野隆一郎（栗田匡相ゼミ）

「マダガスカル農村における夫婦間交渉力が子どもの健康に与える影響—パネルデータによる実証分析—」

### < 講評 >

学部学生の学術論文として優れた水準に達しているという理由から、個人執筆論文1編と共同執筆論文1編の2論文が受賞した。

1つめの論文「持株会社制度における企業結合の理論的研究—費用削減効果発生による有効性の検証—」は、持株会社制度、とくに株式移転を利用した水平的企業結合を、費用削減効果に着目して理論分析を行っている。モデルはSklivas（1987）等の「オーナーマネージャーゲーム」を採用し、2段階ステージの展開ゲームをバックワードインダクションで解き、サブゲーム完全均衡を導き利潤の比較等を行っている。費用削減効果が一定以上存在する場合、持株会社、ライバル企業ともに統合前より利潤が増し、持株会社制度による企業統合が有効であることが示される。本研究は、問題意識の明確さ、理論的整合性等の点で高く評価された。

2つ目の論文「マダガスカル農村における稲作新技術の社会的学習要因と情報の中心性」は、マダガスカルにおけるPAPRIZ Intro Packの普及促進を通じて、稲作発展を目的とし、JICAが米の収量増加を目標に実施している「コメ生産性向上・流域管理プロジェクトフェーズ2」に焦点を当て、調査および研究を行ったものである。確率的フロンティア分析を用いて、日常会話の友人数とネットワーク中心性については稲作の技術効率性と関係がなく、農業組織の加入が効率的生産と関係があることを示している。さらにPAPRIZ Intro Packの普及と運用の課題を分析している。本研究は、アンケート設計から実施、分析に至るまで意欲的な研究である。分析手法の適切さ、興味深い推察結果等が高く評価された。

なお本年度は入賞した論文に次ぐ優れた上記の2編に佳作を授与する。前者は「完全養殖ウナギの支払意思額」であり、ウナギに関するアンケート調査による評価価値の分析である。後者は「マダガスカル農村における夫婦間交渉力が子どもの健康に与える影響—パネルデータによる実証分析—」であり、農村調査によるパネルデータ分析である。ともに入賞作に比べても遜色のない論文である。

（懸賞論文選考委員会委員長 桑原秀史）